

< テーマ > 小・中学校の特別支援教育を支える特別支援学校のセンター的機能の活用と
そのための取組

< 調査報告者 >

藤井茂樹 (国立特別支援教育総合研究所教育相談部 総括研究員)

< 話題提供者 >

高橋広行 (京都府宇治市立岡屋小学校 教頭)

小松美恵子 (京都府宇治市教育委員会教育指導課 学校教育指導主事)

今泉祥子 (京都府立桃山養護学校 教諭)

澤田均 (京都府教育庁指導部特別支援教育課 総括指導主事兼副課長)

< 指定討論者 >

宮崎英憲 (東洋大学 教授)

< 司会者 >

松村勘由 (国立特別支援教育総合研究所教育支援部 総括研究員)

第 3 分科会では、まず司会者の松村総括研究員より、本分科会の趣旨及び日程説明が行われ、続いて調査報告及び話題提供がそれぞれ行われた。

藤井総括研究員は、本研究所の研究活動の一環として行った、特別支援学校のセンター的機能と地域支援に関する調査結果の概要を報告し、センター的機能の効果的な展開と地域支援体制整備との関連及びその重要性等について提案した。

高橋氏は、行政経験のある小学校教頭という立場から、午前中の全体会で「特別支援学校のセンター的機能を活用して」と題して行った事例紹介の要点をまとめ直す形で、特別支援学校のセンター的機能と地域の学校が日常的に連携を図ることができるシステムと特別支援学校側のアドバイスを生かせる学校全体の支援体制の充実の必要性についてそれぞれ言及した。(要項 p22-23 参照)

小松氏は、市教育委員会指導主事の立場から、宇治市の取組として、連携可能な特別支援学校、市の特別支援教育推進委員会等の事業や取組等を報告するとともに、併せて「生き生き学級支援員」や不登校児童生徒への支援の取組等も紹介し、課題として「学校の組織力強化、授業改善や学力向上へのつながり等」について言及した。(要項 p38-39 参照)

今泉氏は、特別支援学校教諭の立場から「小学校と中学校をつなぐー中学校卒業後の進路を視野に入れてー」と題して、実際の事例と勤務校のももやま支援センターの事業について紹介し、高校を念頭に置いた小・中学校への支援、小・中学校内全体での質の高い研修と子どもについての情報共有、個別の事例を超えた、地域の課題に沿った具体的支援、がそれぞれ必要とされていること等について言及した。(要項 p40-41 参照)

澤田氏は、府教育委員会指導主事という立場から「子どもと保護者に届く特別支援教育の推進 特別支援学校のセンター的機能の充実」と題して、国の事業と府単独事業の連携、特別支援学校内の地域支援センターの開設、関係教職員の専門性の向上、の取組がそれぞれ報告され、課題として「管理職の意識向上、専門性のある人材育成、小・中学校の学校体制の向上」について言及した。(要項 p40-41 参照)

< 話題提供者、会場参加者との質疑応答 >

司会者と各話題提供者、会場参加者との間で次のような質疑応答が行われた。

センター的機能活用のために小学校側に必要とされるものについての質問を受けた高橋氏は、主訴から適切にアセスメントすること、その後の支援を受けて具体的な指導計画につなげていくこと、保護者との教育相談がそれぞれ必要であるとした。同様の質問を受けた会場参加者からは、支援を活用するための小学校側の体制の大切さ、集団での取組の中での困難さを持つ小学校側と個別での取組を得意とする特別支援学校側の違いにある難しさを指摘した。続けて今泉氏は、支援を受ける学校側のシステムを理解した上で、一方的な提案ではなく、話し合っていくことの重要性を指摘した。さらに会場参加者から、普通教育の専門性を小学校側が自信を持って出すことの必要性が指摘された。

センター的機能活用の経緯等について質問を受けた小松氏は、これまでの特別支援学校と市内の小・中学校児童生徒のつながりについて蓄積について触れ、教育委員会だけでなく教員同士のつながりの中からも、特別支援学校の専門性を活用する動きが生まれたことを紹介し、市教育委員会が今後果たすべき役割として、管理職への働きかけを指摘した。同市小学校教員である会場参加者からは、小学校卒業以降の育ちについての知見を有する特別支援学校からの支援の有効性について指摘した。

支援を行うために役に立つ特別支援学校側のこれまでの蓄積について質問を受けた今泉氏は、障害特性に特化したものではなく、子どもの育ちを支えてきた歴史について指摘した。それを受け、司会者は、これまでの蓄積に加えてあらたな経験が新たな専門性となっている可能性について指摘した。

府としての取組についてあらためて紹介を求められた澤田氏は、今後の人材育成や設置者の異なる学校間の連携の促進、関係機関との連携の強化等の必要性について述べた。続いて高校職員である会場参加者から、勤務校では特別支援教育の取組は始まったばかりであり、特別支援学校のセンター的機能を活用する動きは今のところないという現状の紹介と、学力の向上や相談体制の構築へのつなぎ等が重要であることが指摘された。その他、地域に信頼される次世代のコーディネーターの育成や地域と協働していける支援センターを作っていく重要性が会場参加者から指摘された。

最後に、特別支援学校がセンター的機能として対応する障害種の範囲の明確化についての会場からの質問に対し、澤田氏は特別支援学校間での連携・調整の必要性を指摘した。

< 指定討論と総括 >

指定討論者の宮崎氏は、それまでの報告や議論を概括した上で、今後のセンター的機能の展開のために、意図や目的の再確認、方法に関する発想の転換、取組の評価、今後の展望が必要であることを指摘し、それぞれについて具体例を挙げながら説明を行った。その中では、各特別支援学校の実情等に応じた取組や各校間・各地域でのネットワーク構築の必要性、特別支援学校内の支援と校外への支援のリンクの充実、支援を受ける側の機能充実への貢献、受け手側からの評価の重要性等について指摘された。

最後に司会者が分科会全体を総括し、今後の取組に向けて知見が共有できたことを確認し、関係者及び参加者へ謝辞を述べた。